

20世紀から21世紀に走りつづけるぞうれっしゃ

小出 隆司

◆ はじめに

絵本『ぞうれっしゃがやってきた』（1983年：岩崎書店）を出版してから、はやいもので21年がたち25刷を重ねる。自費出版から数えると29年目を迎える。この間、全国の子どもの幸せと平和を願う多くの方々のお支えでいろんな領域に生かされ活用されて、今日も走り続けている。愛知歴教協の歩みの中で誕生して支えられてきた作品である。1999年定年退職をしたおりに県歴教協の総会の記念講演で、この作品について語らせていただいたが、15年ぶりに発行される『あいち歴史教育』第8号に掲載できることを嬉しく思う。《ぞうれっしゃ》に関わる歴史へのアプローチは、今も続けているが、以下記述することは、現時点での経過報告として位置づける。紙数の関係もあり具体的な資料は載せない。後日、小冊子にまとめる予定である。

イラクへの自衛隊の派遣という事態が平和憲法を蹂躪して強行され、引き続いて有事関連法案が国会に上程された。現代の「国家総動員法」である。

厳しい歴史的な状況下であるが、平和的共存を希求して、いま、現代の民話であるこの作品を通して《命の尊さと平和の大切さ》《あすへの夢と希望を持つことの素晴らしさを》を子どもたちと共に学び、考え合う平和教育の題材の一つとして積極的に活用されることを切望する。

I 現代の民話としての『ぞうれっしゃがやってきた』

現代の民話である『ぞうれっしゃがやってきた』は、名古屋の東山動物園を中心に展開された歴史のドラマである。この作品を基に、命の尊さと平和の大切さ具体的に掴み、如何なる厳しい状況下においても人間としての尊厳さと誇り（＝プライド）を保持し、将来を展望し、夢と希望を持って生きることの素晴らしさを確かめあえればと思う。

同時に、今、生きている現実を直視して、《明日に生きる子どもたちの幸せと平和を願う》わたしたちは今何をなすべきかを自らに問いかけて、具体的な行動を展開したい。

II 《ぞうれっしゃ》についての概要

アジア太平洋戦争下にあつて、日本の動物園では、空襲で動物園の檻が爆破され逃げ

出した動物たちが、周辺住人に危害を加える危険があるからという名目で、罪もない多くの動物たちが処分された。世界の動物園では、特別な状況に置かれた動物園（例：ベルギーのアントワープ動物園…ドイツ軍に包囲され動物たちの飼料が入手出来なくなり銃殺した。）を除いて動物園の動物たちを処分するようなことはみとめられなかった。

そうした状況の中であって、名古屋の東山動物園では、園長・飼育係の職員の懸命な努力、軍紀を破ってそっと支援をした三井大尉、近隣の人々（農民・パン工場人々）の陰ながらの協力などにより4頭のうち2頭の象が守り抜かれた。

そして、敗戦後、本物の象が見たいと願う子どもたちの夢と希望を叶えるために、占領下という厳しい条状況下ではあったが、当時の大人たちが、知恵を集め、占領軍との交渉をして、象を見るための特別列車＝象列車を走らせることに成功させた。

本稿は、絵本『ぞうれっしゃがやってきた』が誕生したきっかけ、象を守り抜いた経緯、戦時下における国内外の動物園経営、子ども議会と象列車、「ぞうれっしゃ」運動と地域文化共同体づくりの実際、これからの展望・展開を具体的に紹介して『ぞうれっしゃがやってきた』の果たしている歴史的役割と今日的意義について述べてたい。

III 絵本の誕生について

はじめに、絵本『ぞうれっしゃがやってきた』はどのようにして誕生したのかについて記す。

1975年のはじめ、一年生の子どもたちに『かわいそうなぞう』（つちやゆきお著）を読み聞かせた。この話は、戦時中東京の上野動物園で、象をはじめ多くの動物たちが、軍や内務省の命令で次々に殺されていく悲しい物語である。

いつも元気で腕白な子どもたちの目に大粒の涙が光り、教室は子どもたちのすすり泣きに包まれた。

私は、子どもたちの様子に当惑した。私は、地元名古屋の東山動物園では、二頭の象が守り抜かれたことを思い出し、悲しむ子どもたちにそのことを話した。すると子どもたちの表情が一変して明るくなった。子どもたちの様子を見てほっとした。しかし、それで終わらなかった。「先生、その話もっとくわしく話して！」と、せがんだ。でも、私はその事実（『本土空襲記録—水谷メモ』パンフ。中部日本新聞）しか知らなかった。一年生だからそのうちに忘れてくれるだろうと考えていたが、そうはいかなくて子どもたちの追及が続いた。ある日、Yこさんが私のそばに来て「先生、ウソを言うことはいけないことだと、お母さんが言っていたよ」と言ってかけていった。このひと突

きの言葉が契機となり、守り抜かれた象にまつわる歴史を掘り起こすこととなった。

ちょうどその頃、各地で戦争体験の掘り起こしや空襲を記録する取り組みが始められていた。愛知歴教協歴史でも、県下の各地域の民衆の歴史を掘り起こす活動を進めていた。

私の場合は、まず、図書館で調べることから始めた。今とちがって、動物園や動物に関する著書はほとんどなかった。たまたま、愛知県図書館が、始めた開架式の書棚で事件小説吉村明著『下弦の月』（毎日新聞社刊、1973年版）を手に取り頁をめくっていると、「動物園」という章が目にとまった。さっそく頁をめくった。その内容は、戦時下における上野動物園で猛獣たちを処分する悲劇を描いたものであった。まだ、コピー機のない時代であり、要点をノートに写した。絵本『かわいそうなぞう』に関わる事柄が、詳しく書かれていた。これは、その後の取材活動に大変役立った。その後、戦時中上野動物園の園長代理＝福田三郎著『実録上野動物園』（毎日新聞社刊、1968年）や『東京大空襲の記録』（全4巻）『上野動物園百年史』（東京都庁刊、資料編共に2冊、1982年）等が、手に入り動物虐殺の真相が分かった。

並行して、地元の中日新聞社の資料室に入れていただき「ぞうれっしゃ」関係の写真に接することが出来た。しかし、このときは、東山動物園の戦時下における動物の処分等に関わるの記事を見つけられなかった。ただ、手元にあったパンフレット『本土空襲記録一水谷メモから』（中日新聞社刊、1972年）所収の記事「名古屋東山動物園では、切迫化により一部猛獣を射殺した。」（1944年12月日）とマカニー・エルドの写真を確認した。今のように簡単に検索してコピーする事は出来ない環境であった。せめて年月日が分かっていたら、直ぐに記事を検索出来たのだが、この時点では無理であった。相変わらず子どもたちの追求は続き困っていた。

同年2月、岡山県で開催された日教組教研全国大会の社会科分科会に自主参加した。絵本『かわいそうなぞう』を題材にした実践報告を聞き感動した。しかし、「感動的な実践報告ですが、象を殺して初めて戦争の悲惨さを知るという点で教材として問題があるのでは、名古屋の動物園では、象を守り抜いたという事実があります。」と発言してしまった。さらに、『日本の教育』（1975年）で、「そういう本がある」と紹介されてしまった。幻の本の出現である。これにはまいった。そんなある日、テレビドラマを見ていて電話帳から人捜しをする場面からヒントを得て、東山動物園初代園長北平英一氏（故人）の所在が確認できた。電話帳から市内に在住されてみえることがわかり早速電話をした。それまでの経緯をお話ししたところ快く会ってくださるといふご返事をい

いただいた。天に昇る気持ちで北王邸をお訪ねした。

「戦後30年を経過して、痛ましいおもいが夢枕に出なくなった。あなたは、それを掘り起こされるのですね」と言われた。会っていただける喜びが先行して、北王さんの胸中を配慮していなかった自分の軽率さをお詫びしてその日は帰路に就いた。

数日後、北王さんから、話をしてあげるといってお電話いただき取材に出かけた。忘れてしまいたい心の痛みを掘り起こす作業は、気の重いこいどでした。しかし、何度もお伺いすることで、動物園での出来事の一つ一つ語ってくださり、戦中・戦後の動物園の歴史を知ることができた。また、北王氏のご家族の皆さん方、象の飼育係りであった浅井力三氏（故人：2002年）や故安藤治助さんのご家族の皆さんをはじめ、当時の動物園に関わりのあった方々を紹介してくださり貴重なお話を伺うことができた。さらに、北王氏から沢山の当時の資料の提供を受けることができた。同年7月、手づくりの小冊子『ぞうれっしゃがやってきた』が刷り上がり国語教材の「かわいそうなぞう」と併読することができた。象を守り抜いた北王園長さんや飼育係の皆さん、その行動をそっと支えてくれた人々。占領下であり、朝鮮戦争突入前夜という厳しい条件の下で、象列車を走らせた当時の大人たち。本物の象にあいたいという夢と希望を実現させるために努力し行動した子どもたちの力強さなどに、子どもたちはおもいおもいの感動を覚えた。

忘れたい事柄を掘り起こされて、いろいろなおもいが錯綜して苦渋を乗り越えて協力して下さった園長さんをはじめ関係者の方々のご協力に頭が下がる思いであった。

歴史の掘り起こしという行為は、当事者にあつては様々な意味で歴史の再評価がともない、個々の人権に深く関わる問題である。それ故に、この点を、最大限に配慮しなくてはならないということを心に強く刻印した。

その後も、取材は続いている。北王氏の故郷を訪ねての取材、象列車に乗った人たち、そのために奮闘された先生方。子ども議會を体験された人たち、その後日の出来事。動物の射殺を任務とした猟友会人たち、象列車を運転された機関士など、新しい出合いを重ねている。

1976年、第27回歴史教育者協議会全国大会が名古屋で開催され、その機会に、絵物語『ぞうれっしゃがやってきた』（山内辰夫・高井昌子 絵）として自費出版し、大会の《地域に学ぶ夜の集い》で北王英一氏の記念講演を得た。この事実は、マスコミを通して全国に告知された。幸い名古屋市文化関係自費出版助成を受け、市内の全小学校にも配布された。そして、この本が、大型紙芝居・フォークソングや子ども劇に発展

し、さらに合唱曲の創作につながることになった。1983年岩崎書店から、画家の箕田源二郎氏（故人）の筆で温かく優しい絵本（2004年現在、26刷）になり、全国の子どもたちのもとへ届けられた。

現代の民話として、ホークソング、演劇、合唱組曲、社会科教科書・英語教科書、平和教育教材・人権教育副読本、アニメーション映画、歌唱紙芝居、国際交流の題材、各種学校の文化祭・総合学習の題材として、いろいろな分野で広く活用されている。

IV. 名古屋の東山動物園では、なぜ象を守ることが出来たのだろうか？

1937年12月24日ドイツのハーゲンバック動物園の無柵式放養式（柵を作らずできるだけ自然な環境を作る）を、当時の付属サーカス団長＝ローレンス・フロイツ氏から教わり、それを参考にして東山動物園が、この年の春に名古屋の東端づれの丘陵地に建設され当時東洋一を誇る東山動物園に、一 4頭の象が木下サーカス団から譲渡されることになった。

日中戦争が長期化する状況の下で、サーカス団への動物の飼料の配給が確保できず困っていた時に東山動物園から譲って欲しいという話が入り、木下団長はぞうの譲渡を決意されたのであるが、団員や家族の説得に半年を要した。いろいろな経緯を経て象を迎え入れる事が出来た若き日の北王園長は、大喜び。「象の来園歓迎式」など一日の行事を終えて、動物たちの様子を見るため園内を巡視した。象舎にやって来ると、象に寄り添いいつまでも離れようとしない象使いの娘さんたちの姿を柱の陰から捉えた。北王園長は、彼女たちの象たちへの深い愛情に感銘を受けた。この人たちのためにも象を大切に育てなくてはと、決意を新たにされた。

戦争は長引き泥沼化の様相を呈していた。動物園は、戦意高揚のために最大限に利用された。その一方では、動物たちの飼料や暖房用の石炭・電力の供給の制限を受けた。北王園長は、動物たちを守り育てるためにそれらを何とか供給してもらおうと何度も役所へ足を運んだ。

やがて、名古屋への空襲が激しくなってきた。1944年の暮れに、とうとう動物園は空襲を受けた。そのため危険な動物を殺すようにという命令が下された。そして、北王園長の自慢のネコ科の動物たちがつぎつぎと殺されていった。

1945年2月に、日本の軍隊（糧秣部隊）が駐屯し、動物園は閉園された。その際非常持ち出しとしてリュックサックに入れ園長室に保管されていた動物園の貴重な動物記録が、リュックサック欲しさの兵士によって燃やされてしまった。自慢の動物たちを

殺され園長としてのプライドは、ずたずたにされていた。園長が、役所に出かけていた留守中のできごとであった。無断で進駐してきた皇軍兵士による心ない行為に北王園長の怒りは天を突き園長室を占拠した将校と激しく渡り合った。兵士たちの園内での行動は、戦う兵士の姿ではなかったという。

このままでは、象も殺されてしまうにちがいない。象だけでも守りたいと北王園長は、軍や警察に何度も足を運び、象を殺す命令を出さないように命がけで頼みに出かけた。

この勇気ある園長の行動を支えた要因があった。それは、1944年春、朝日新聞社主催・陸軍航空本部名古屋本部後援で「飛ぶ鳥と飛行機の展覧会」が、陸軍記念行事として開催された時、某飛行機製作会社の飛行機製作技師の友人から「日本はもう一年はもたない」と、日本の敗戦が間近いことをこっそりと知らされていた。そして、一頭でも多くの動物を守るようにと励まされていた。この情報は、園中での光明であった。

「一年だったらなんとかなる。」心の中で自らを奮い立たせた。一方、動物園の飼育の人々は、飼料確保のために園内を耕し作物を栽培したり、空襲下に近隣の農家を訪ねたりして、餌の確保に努めた。こうした動物園の動きを察知した、近隣の人々がそっと影から支えた。地元のパン工場からは、サンドイッチのみみを取ったパンのくずが届けられたり、近村の農家からは小麦・野菜のくず・藁などの差し入れがあった。

さらに、づつと後になって明らかになったが、象の処分命令を出さず、なおかつ軍紀を破って象舎の通路に象の餌になるマイロをそっと積み込ませた故三井獣医大尉の無言の支援があった。事の顛末を知らせて下さった方は、近衛兵として三井氏と共に在った戦友の、越後松平氏の孫にあたる松平康邦氏（故人）。（毎日新聞朝刊：1983.8.13）。現在の絵本が岩崎書店から、出版される直前の事であった。私は、早速、東京春日町のお宅を訪ねた。三井大尉のお人柄や象を守った秘話を聞くことができた。さらに、その足で三井大尉邸（三井文庫）を紹介していただいて訪問した。京都の公家出身の縁夫人（故人）は、夫が動物好きで娘さんと獣医を開業するのを楽しみにしたこと、戦争で金儲けをする同族会議に出ることを避けていたこと、自ら兵士として前線に立つことを希望したこと、また、戦後は三井プロダクションという映画会社を設立して教育映画を作っていたが、失敗した事など話して頂いた。大尉は、自費出版した『そうれっしゃがやってきた』を持参して家族と名古屋へ出向き、象舎に軍馬の餌を積み込ませたことなど戦時中のことを家族に話された。また、当時の城山の八幡社の宮司さんや下宿先の家を訪ねたりして旧交を温められたとのこと。

象列車が走った1949年には、松川事件、下山事件・三鷹事件と朝鮮戦争前夜の暗い事件が相次いで起きていた。それ故、〈ぞうれっしゃのニュース〉は、明る出来として新聞がキャンペーンをはった。しかし、その一方では、冷戦体制の下で東アジアの後方基地としての日本の重要性から、反戦平和の勢力を押さえ込む必要があり、レッドパージの嵐が吹きまくった。戦後民主主義教育を推進しようと活動していた多くの教師たちが、教育現場から追放された。占領軍が、解放軍という幻想が崩れる時期であった。

子ども議会は、占領軍（GHQ）からの指示で、こどもの日の制定を記念して始められたようだが、市町村・都道府県教育史や学校沿革史からは、はっきりしたことが確認できない。占領軍（GHQ）の管轄が地域によって分けられていて、子ども議会のありようも国内の東と西では、異なっていた。東京や長野では、戦後民主主義の担い手を育てるべく、自主的に子ども議会に相当するものを組織する動きがあった。子ども議会は、こうした流れとGHQの指示とが合流した形で進行したようだ。

しかし、占領下で子ども議会に関わった教師や子どもたちは、言葉では言い尽くせない苦難と重圧の歴史が襲っていたことを指摘しておきたい。このあたりの事情については、敗戦直後の混乱期の出来事でもあり、教育史から落脱し今後の究明課題である。

VI. 走り続ける「ぞうれっしゃ」の果たしている役割はなにか（まとめ）

1. 広い意味での平和教育と地域文化共同体づくり

現代の民話としての絵本『ぞうれっしゃがやってきた』は、自費出版して以来四半世紀が経過した。その間、ホークソング、演劇、合唱構成、アニメーション映画、社会科教育・平和教育・英語教育・人権教育（道徳）、音楽教育の題材として活用されている。その分野は、平和教育〔養・幼・小・中・高・大〕として学校教育の場であり、子どもの幸せと平和を願う地域の文化活動の場であり、平和運動の場である。

1999年7月。東山動物園に象列車50周年記念の碑の贈呈式が開かれた。全国の子どもたちやそれを支える大人たちの手で建てられた。名古屋市の協賛、動物園の職員のお力添えがあって実現できた。

記念碑は、20世紀の子どもたちから21世紀の子どもたちへ、平和な世界をを實現していくためのシンボルとして、アジア象の象舎の傍らで、動物園を訪れる人たちに優しくほほえみ、語りかけている。

この歴史を残された人々の思想と行動は、多くの人々に平和の大切さと命の尊さ、夢と希望をもって生きることの大切さを教えてくれている。

戦時中、北王園長はじめ全国の動物園園長は、全国動物園会議をしばしば開催して輸入困難になった状況で、動物をいかに増殖させるかを研究協議し、動物たちを守ろうと誓いあっていた。しかし、その努力は叶えられなかった。

そんな中で名古屋の象が二頭護り抜かれたのは、何よりも北王園長をはじめとする動物園の職員飼育係の動物愛と必死の努力であった。それを、周りの人々が支え、さらに三井大尉との出会った。北王園長の行動力を引き出したものは、何よりも動物に対する愛情と動物園に関わる人間としてのプライドをぎりぎりのところで守り抜きたいという強い意志があったこと、さらに近い将来戦争が終わるという情報を得て明日への展望がもてたこと。人間としての優しさ、強さそして、先見性が、象を守ったのだ。

V. どうして象列車を走らせることができたか

— 子どもたちの心がひとつに集まって走らせた象列車！子ども議会とは？—

1949年、東京都台東区役所で、子ども議会の緊急総会が開かれ、上野動物園への「象借入問題」を討議した。満場一致で二名の代表（大畑・厚田）を名古屋へ派遣することを決定した。代表は、5月5日に開かれる名古屋の子ども会臨時総会（於：名古屋市議会）に出席して、そのことを訴えた。代表は、市議会議長にも陳情し、さらに東山動物園に向かい北王園長に「せめて一頭だけでもいいから貸してほしい」と、懇願した。北王園長は、二頭の象は、健康状態が余り良くないこと、三トンの象を運ぶ汽車の都合がつかないこと、そして、何より二頭の象を引き離すことが難しいことを実験で示し、象は貸せないと説得した。諦めきれない代表は、さらに市長に陳情した。しかし、結論は同じであった。

市長は、直ぐに、東鉄局、動物園の関係者を集めて話し合い、象を貸すことは出来ない代わりに象を見るための特別列車を走らせることを決定した。それが象列車である。

都合で第一陣は、彦根市からでしたが、東京は、第二陣でやってきた。その後、千葉、埼玉、大阪、金沢、津、神奈川などから続々と名古屋へ象列車が走った。戦時中修学旅行が出来なかった子どもたちも多数訪れた。動物園に向かう人々の群が大河のごとく沿道を流れた。

当時は、占領下で、全て占領軍（GHQ）の許可が必要で、鉄道も占領軍鉄道輸監督官（RTO）の許可なしに団体列車は出せない時代であった。朝鮮戦争前夜で、戦後の平和と民主主義を願う人々に大きな不安を与えていた。敗戦後の日本を大きく規定したドッジライン、シャープ勧告などアメリカによる対日占領政策が、実施されていた。

- 英語 (内野信幸他2名、三友社 1986)、兵庫県人権教育 小2 副読本 2002 より使用)
- ・動物ノンフィクション『はしれぞうれっしゃ』(小出隆司文、中沢正人絵、学研 1994)
- ・『草の根の反戦・抵抗の歴史に学ぶ』(平和文化社 1990)
- ・『平和といのちの授業づくり』(小学館 1995・8)
- ・『人物でたどる日本の歴史』一象をまもったひとびと (満川尚子文、岩崎書店 1994)
- ・『動物園の昭和史』(秋山正美著、データハウス 1995)
- ・『地域でできるこれからの国際交流⑤ 人物、動・植物で調べる国際交流』(監修
ピーター・パラカン、編著こどもくらぶ、岩崎書店 2002・4)
- ・『木下サーカス90周年』(1992、木下サーカス刊)
- ・『インディラがやってきた』(志村武夫著、佼成出版社 1979)
- ・『動物園の歴史』(1975)『続動物園の歴史』(1977) 佐々木時著雄、西田書店
- ・『大阪天王寺動物園70周年史』(大阪府、1985)
- ・『London Zoo』(by Peter Guillery、1993)
- ・『THEY ALL CAME INTO THE ARK』(by C. H. KEELING、CLAM 1988)
- ◎NHK: テレビ・ラジオ 東海北陸・ぞうれっしゃ50年・夜の宅急便・子ども図書館・タイ向け放送(タイの木下動物病院開設記念)
- ◎中京テレビ: 「北王さんぞうをかしてください」日本動物協会賞。
- ◎CBCテレビ: 「名古屋ウイクリー」ぞうれっしゃから50年—ゲスト対談(1999.

9. 24)

- ◎SVN毎日新聞かんさいビジョン: アニメーション「ぞう列車がやってきた」
ゲスト対談 (1992.8.7)

◎各地域の音楽会・各学校での文化祭のビデオ・ラジカセなど貸し出し。「ぞうれっ
しゃ」に関わる情報などの提供。(送料は自己負担) 【2004年3月現在】

< 2004.8.20 TV 幹系 >

3.30	CB	続くか?金メ	8
		タリスト株	787681
55	トレびあん		453865
00	レディス4	ぞう列車	
		語り継がれる愛情物語	
		平和の願い	495643
55	Gへいこう		454594
00	アイ	25分愛知から	
		夏バテにオススメ、岐	
		車・金山のピカイチ	
	◇55	住まい	33778

おはねの家



小 出 隆 司

〒453-0066
名古屋市中村区椿上町2-44-1
TEL/FAX 052-411-4606
E-mail t-koide@mpd.biglobe.ne.jp
HP http://www.5b.biglobe.ne.jp/electrain/

イラクをはじめ中東諸国が一刻もはやい占領軍の撤退と国連を主導とするイラク復興を求めているのに逆行して、自衛隊の本隊がつつぎと戦闘地域のイラクへ派遣されている。イラク占領反対「国際共同行動」が、地球上を囲む。一人一人の具体的な行動が求められている。

教育現場では卒業式・入学式出の「日の丸・君が代」の強制がエスカレートしている。「戦争のできる国づくり・人づくり」のための「教育改革」の推進、「教基法・憲法改悪」への動き、「心のノート」の配布など平和憲法の打ち壊しが急迫している。

課題は重く山積しているが、明日に生きる子どもたちの幸せと平和のために知恵を出し合い連携して前進しなければならない。「ぞう」はそのために皆さんと走り続ける。

2. これからの取り組み

- ①アジアの国々との平和友好をめざす交流をすすめる。(国内外での講演会、コンサート、映画会……)
- ②子どもの幸せと平和を願う、世界の子どもたちとの国際交流会。
- ③「ぞうれっしゃの家」(Tel・Fax 052 - 411 - 4606)草の根子ども議会・各種催し。
- ④「ぞうれっしゃのなかまたち」の会、「全国ぞうれっしゃネットワーク」の活動として、学校の文化祭(「総合学習の時間」を活用した音楽会・演劇・平和展、映画会、講演会)、修学旅行などの支援協力、各地の地域文化活動の支援協力(地域コンサート、映画会、講演会、平和のための戦争展……)

● 参考資料:

- ・『動物の四季』(北王英一著、文藝春秋新社、1956)
- ・『東山動物園日記』(朝日新聞社社会部編、1977)
- ・絵本『ぞうれっしゃがやってきた』(小出隆司著・笑田源二郎絵、岩崎書店 1983)
- ・アニメーション映画「ぞう列車がやってきた」(小出隆司原作、加藤盟脚本監督、共同映画社配給 1992、ビデオ=バンダイ社、アニメ絵本=岩崎書店)
- ・『ぞうれっしゃよ走れ』共著(清水則雄・藤村記一郎・小出隆司、労働社 1989)
- ・合唱構成『ぞうれっしゃがやってきた』(小出隆司原作、清水則雄作詞、藤村記一郎作曲 1986、楽譜=全音・ぼるん舎)・CD同名=音楽センター)
- ・紙芝居とミュージカル「ぞうれっしゃがやってきた」(大須賀ひでき作詞作曲・塩浦信太郎絵音楽センター 1999)
- ・教科書:中教英語2年生(2001年度まで)、教出社会6年下(2001年度まで)、高校